

## (4) 住田町他「島根県災害ボランティア隊」プランⅡ

主 催：社会福祉法人島根県社会福祉協議会（会長：今岡義治）

受 入 先：いわて GINGA-NET プロジェクト（岩手県立大学学生ボランティアセンター、（特）さくらネット、（特）ユースビジョン）

場 所：岩手県大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市、住田町ほか

期 間：第1クール 2011年8月17日（水）～23日（火）  
 第2クール 2011年8月31日（水）～9月6日（火）  
 第3クール 2011年9月14日（水）～20日（火）

### 【行程表】\*各クール共通

第1日（水）	11：30	浜田キャンパス出発～大型バスで移動
	14：00	出雲キャンパス発
	15：00	松江キャンパス発
	15：15	いきいきプラザ島根発（車中泊）
第2日（木）	9：00	岩手県住田町（いわてGINGA-NETベースキャンプ）着
	10：00～	開会式
	10：30～13：30	沿岸部視察、活動地域下見
	14：00～15：30	入浴施設にて入浴
	16：30～	宿舎(オリエンテーション 食事 チーム交流会 宿泊)
第3日（金）	23：00	就寝
	7：00	起床
	7：30～	朝食、朝のオリエンテーション、準備
	8：30～	活動地へ移動
	9：30～15：00	ボランティア活動
	17：00～18：00	入浴施設にて入浴
第4日（土）	19：00～22：30	宿舎(食事・活動ふりかえり 宿泊)
	23：00	就寝
	第5日（日）	※第3日と同様
	第6日（月）	※第3日と同様
	第7日（火）	7：00
7：30～		朝食、朝のオリエンテーション、準備
8：30～		活動地へ移動
9：30～14：00		ボランティア活動
16：00～17：30		入浴施設にて入浴
18：30～21：30		宿舎着(食事・活動ふりかえり 解散式)
22：00		住田町を出発 ～大型バスで移動（車中泊）
第7日（火）	15：45	いきいきプラザ島根着
	16：00	松江キャンパス着
	17：00	出雲キャンパス着
	19：30	浜田キャンパス着

## ◆第1クール

主な活動：サロン活動（お茶っこサロン）、物資の配給、仮設住宅訪問、木工教室、ビラ配り、ニーズ調査、風鈴配布（りんりん隊）

キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考
1	浜田	3年 稲元 藍	イナモト アイ	女	サブリーダー
2	浜田	3年 山口 聡一郎	ヤマグチ ソウイチロウ	男	
3	浜田	2年 佐竹 亮祐	サタケ リョウスケ	男	リーダー
4	浜田	2年 増渕 翔	マスブチ ショウ	男	
5	浜田	2年 若松 直樹	ワカマツ ナオキ	男	
6	浜田	1年 岡本 拓郎	オカモト タクロウ	男	
7	松江	2年 辻畑 裕子	ツジハタ ユウコ	女	サブリーダー
8	松江	1年 河上 孝子	カワカミ タカコ	女	
9	松江	1年 丁田 香奈	チョウダ カナ	女	
10	松江	1年 内藤 弘子	ナイトウ ヒロコ	女	
11	松江	1年 前田 利奈	マエダ リナ	女	
12	浜田	職員 島田 成毅	シマダ ナルキ	男	往路同行
13	浜田	職員 土井 功造	ドイ コウゾウ	男	復路同行



### 【2011年8月18日(木)11:00～13:30】沿岸部視察

- ・視察をして、テレビで報道されている以上に町が受けた被害がひどいものだったのだと実感しました。海岸線が1km近く後退したというお話を聞いたときは津波の恐ろしさを再認識させられ、被災した方の恐怖を思うと言葉を失いました。
- ・今日、沿岸地を実際見て言葉がでませんでした。震災から5ヶ月経っていて、きれいに整備されているところもありましたが、車の変形していたり、看板の棒が折り曲がっていたりして、そのときの津波の恐ろしさを実際見て感じることができました。テレビとかで見るよりも心にズシッと来ました。
- ・家屋がまるでとても軽い物みたいに津波によってたくさん流されているVTRを見たり、ニュースで見て知ってはいたが、現場を知ったから恐怖を感じた。

### 【2011年8月19日(金)10:00～15:00】

- ・こんな状況でも、大人の方々は確実なご近所づきあいを深めているように思ったし、小さい子供はびっくりする程元気だった。でも、余震が来たときにそれまで笑って遊んでいても一瞬で緊迫した表情になって「まだゆれている？まだ？」と不安がっていたことが印象に残った。3月11日の大地震が小さい子供たちにすごく恐怖心をつけていったのだなと思った。
- ・人生で初めて仮設住宅を見てどのような生活をしているのかわかりました。仮設住宅の不便な点をお聞きする機会が何回かありました。まだまだいろんな支援ができると思いました。
- ・1日目を終えて反省点が見つかった。住民の方からは、ボランティアの人達は何をしにきているかわからないとの言葉を受けて、正直ショックだったが、その方のおっしゃるとおりで、まだまだやらなければならないことや今自分らに出来ることをしっかり考えてやらなければならないと思いました。

## 【2011年8月20日(土)10:00～15:00】

- ・仮設住宅でも場所によって雰囲気や環境に差があり、入ってからの日数が短いと自分たちが何に困っているかもわからないと言う方が多くいた。そういったところでは、より深くお話をして言葉の中からニーズを探ることが重要だと思った。
- ・積極的に自宅訪問をするべき。また、自分たちは学生であり、ボランティアであり、お年寄りの方々からすると孫のような年であるため、いろんな質問をしていくべきだと思った。
- ・足の悪いお年寄りは、数十メートル歩くだけでも大変なので、こちらから話しかけることも考えておく。

## 【2011年8月21日(日)10:00～15:00】

- ・かき氷が好評で、子供達はおいしいと言って食べてくれていた。片付けを手伝ってくれる子供もいたり、助けられることも多かった。やはり子供達は素直な子が多いと感じた。また、距離がだいぶ縮まった。
- ・蛸ノ浦では、お年寄りの方は来てくれなかったが、作った物を配りに行くと喜んでもらえ、話を聞くことそのものを望んでいる方がいることがわかり、訪問することも無駄でないことがわかった。しかし、来られることを敬遠する方もいたので、その面では個々の要望により密着した活動が必要だと思った。
- ・被災した側も、何かやらなきゃと思っているけどやる気が出ない。心に穴が空いたようだけどボランティアに来てくれて嬉しい。ありがとうと何度も言われ嬉しかった。

## 【2011年8月22日(月)10:00～14:00】

- ・仮設住宅に住む75歳の方と話をしたのですが、妻と孫を亡くされていました。その方は「暗いままでは何も変わらない。」と言っており、1週間に1回のペースで仮設住宅に住む方に挨拶まわりをされ、以前の避難所では、米の配給がほとんど無かったため、農協に声をかけ避難所への米の配給を可能にしたそうです。信じられないくらい前向きで、活動的な方に出会い、驚きと感動を感じました。
- ・子供達は、ホント素直な子ばかりで、帰るときバスが見えなくなるまで手を振ってくれたりと本当に可愛い子が多かった。老人の方、子供の笑顔が最後まで見れて良かった。
- ・毎日来てほしい。いつでも遊びに来てね。ありがとう etc...数々の感謝の言葉をかけてくれて本当に嬉しかった。また、きっと陸前高田を訪れたいと思った。風鈴をよるこんでいただいたので良かった。

## 【一週間を通しての感想】

- ・まずは多くの方々に感謝しなければなりません。本当にありがとうございました。初めての体験だったが、学ぶことが多くて本当に一生の思い出に残る活動が出来た。
- ・ボランティア活動を通して思ったことは、ボランティアはされる側だけに利益がでるということではないということです。今回ボランティア活動を通して学んだこともたくさんあったし、これからの大学生活の課題を見つけることができました。また、全国の大学生から刺激を受けこれからの大学生活のモチベーションを上げることができました。これからも夏休みや春休みを利用して、こういう機会に積極的に参加していきたいと思います。
- ・“早かった”この一言に尽きます。7日間がこんなに早く過ぎるのかと感じました。上中島チームに所属し、15人という人数で活動していましたが、こんなに真剣に積極的に話し合えると思っておらず、とても有意義な時間を過ごすことができました。

## ◆第2クール

主な活動：サロン活動（お茶っこサロン）、チラシ作り、チラシ配り、お茶っこサロン開設のための現地調査

キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考	
1	浜田	4年	富岡 秀行	トミオカ ヒデユキ	男	サブリーダー
2	浜田	3年	糸山 大樹	イトヤマ ダイキ	男	リーダー
3	浜田	3年	西岡 仕琦	ニシオカ シキ	男	
4	浜田	1年	藤本 みのり	フジモト ミノリ	女	
5	松江	1年	石川 ひろみ	イシカワ ヒロミ	女	
6	松江	1年	岩垣 智絵	イワガキ チエ	女	
7	松江	1年	岩佐 笑里香	イワサ エリカ	女	
8	松江	1年	澤田 春菜	サワダ ハルナ	女	
9	松江	1年	西村 彩	ニシムラ アヤ	女	サブリーダー
10	松江	1年	水川 瞳	ミズカワ ヒトミ	女	
11	松江	1年	山脇 菜摘	ヤマワキ ナツミ	女	
12	出雲	地域	藍原 未央	アイハラ ミオ	女	
13	出雲	地域	橘 知佳	タチバナ チカ	女	サブリーダー
14	出雲	地域	宮脇 溪	ミヤワキ ケイ	女	サブリーダー
15	出雲	2年	安部 泉美	アベ イズミ	女	
16	出雲	2年	小川 佐和子	オガワ サワコ	女	
17	出雲	2年	高下 万里奈	コオゲ マリナ	女	
18	出雲	2年	森山 聡子	モリヤマ サトコ	女	
19	出雲	2年	山口 史剛	ヤマグチ フミタケ	男	
20	出雲	2年	山根 和也	ヤマネ カズヤ	男	サブリーダー
21	出雲	1年	北廣 夕貴	キタヒロ ユキ	女	
22	出雲	1年	島井 菜穂	シマイ ナホ	女	
23	出雲	1年	高野 仁華	タカノ ニカ	女	
24	出雲	1年	東條 菜子	トウジョウ ナコ	女	
25	浜田	職員	山代 敬二	ヤマシロ ケイジ	男	往路同行
26	浜田	職員	福代 美保	フクシロ ミホ	女	復路同行



### 【2011年9月1日(木)11:00～13:30】沿岸部視察

・ガレキなどはだいぶ片付けられていましたが、所々まだ何も手をつけられていないような場所もあり、全体としての復興までには、まだまだ時間がかかると思いました。津波のことばかり考えていて、火事のことなどはほとんど知りませんでした。中学生が小学生の手を引いて避難した話を聞いて、みんなで助け合う気持ちがどれほど大切かわかりました。海が見えない場所でも津波の被害にあっていて、本当に津波の恐ろしさを知りました。

・今日は主に沿岸部視察をして、見慣れない光景を目の当たりしました。以前、宮城で見た光景とは違うものがあったり、同じようなものもありました。そして、今日の一番の衝撃はやはりビデオでした。当時の映像を見て、リアルタイムでの映像を見て、津波の恐ろしさがわかりました。家も船も流されていくのが見え、避難していた人も何も出来ずにただ待つしかない。ビデオを回しながら「すごい」「地獄だ」と何回も声が入っていたのは、本当に当時の人達の心の叫び声だと思いました。

### 【2011年9月2日(金)10:00～15:00】

・チームの人達みんなで話し合っ、お茶っこサロンの企画を考えることができたので、良かったと思います。チラシも300枚ちかく作れて良かったです。

・仮設住宅ごとにそれぞれのニーズがあり、全く違う対応が求められていると思いました。

・よそ者をすぐに受け入れようという雰囲気ではないため、難しいこともある。

## 【2011年9月3日(土)10:00～15:00】

- ・子供の中で、頑なに家に帰るのを拒む子供がいて、ずっと学生と一緒にいたいという様子であった。子供の中で、警報を聞くと敏感に津波のことを気にしていた。
- ・男性の参加率の低さを実感し、一人暮らしのおばあちゃん達の積極性に驚いた。サロンのニーズも実感できたが、ある程度の客層に限界があると感じた。
- ・サロンの中の活動はどうしても外に分かりづらい。体を動かしたい子供にとって、中だけでは遊びが足りない。子供達は、自分から何か飲みたいや食べたいとは言わないので注意。
- ・子供達の元気良さに最初は驚きました（仲良くなれて良かったです）。地域の方々との交流があまりできなかったのはくやしいです。明日はもっと大人の方と交流できたらなあと思います。天候のせいで、外遊びがあまり出来なかったため、室内の遊びをもっと充実させる。
- ・仮設住宅を一軒一軒ほぼ全て回れて良かったです。仮設住宅に入られている方と直接ふれ合って、仲良くなれて良かったと思います。

## 【2011年9月4日(日)10:00～15:00】

- ・全体的に住民の方たちに楽しんでもらえたので良かったと思います。小さな子供が津波や地震のことを自分から話してくれたのが、少し衝撃的でびっくりしました。
- ・小さい子が自分で津波のことを言っていた。お婆さんが、男の子に注意していたが、自分達でなければいけなかった。お婆さん同士の繋がりは強い。
- ・男性の参加があったので良かったです。あと、昨日話した女性の方が会いに来てくれたのが、とても嬉しかったです。

## 【2011年9月5日(月)10:00～14:00】

- ・ボランティアが主役ではないことを実感できた。あくまでもサポートが役割。やりたいことが必要とされているかどうかはわからない。
- ・仮設住宅には、まだまだ住民と慣れない子供が多くいる。
- ・地域の大人とふれ合うことができ、なおかつゾウさんタオルの手芸を教えてもらった。
- ・仮設住宅以外の方は、サロンは被災者の人のためのものであるという意識が強い。

## 【一週間を通しての感想】

- ・活動時間はあまり長くなかったですが、得るものは多かったです。被災者の方々の気持ちや身上など、本当に勉強になりました。自分のことより、学生のことを気遣っていただく場面もあり、とても感動しました。
- ・みんながそれぞれの考えを出し合うことで、考えながら質の高い活動が出来たと思う。目に見える成果よりも続けていくことが重要だと思いました。
- ・最初は、自分自身何ができるのか分からなかったけど、実際に現地を見て、現地の人々とふれ合って、この後、自分がやらなければならないことが見えてきたような気がします。



## ◆第3クール

主な活動：サロン活動（お茶っこサロン）、神社清掃、学校の引っ越し手伝い

キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考
1	浜田	4年 岡村 沙織	オカムラ サオリ	女	
2	浜田	4年 鈴木 綾菜	スズキ アヤナ	女	
3	浜田	3年 柿木 幸恵	カキ サチエ	女	
4	浜田	3年 鹿児島 健司	カゴシマ ケンジ	男	
5	浜田	3年 杉原 史江	スギハラ フミエ	女	
6	浜田	3年 仲宗根 大輔	ナカソネ ダイスケ	男	サブリーダー
7	浜田	3年 花尾 滯	ハナオ ミオ	女	
8	浜田	3年 松尾 理瑠	マツオ リョウ	女	
9	浜田	3年 吉本 拓司	ヨシモト タクシ	男	リーダー
10	浜田	3年 吉本 真奈美	ヨシモト マナミ	女	
11	浜田	2年 大國 加苗	オオグニ カナエ	女	
12	浜田	2年 小川 千尋	オガワ チヒロ	女	サブリーダー
13	浜田	2年 金地 亮典	カネジ アキノリ	男	
14	浜田	2年 佐々木 正典	ササキ マサノリ	男	
15	浜田	1年 奥原 有希恵	オクハラ ユキエ	女	
16	浜田	1年 藤田 寛子	フジタ ヒロコ	女	
17	浜田	1年 吉岡 莉奈	ヨシオカ リナ	女	
18	松江	2年 門脇 志帆	カドワキ シホ	女	サブリーダー
19	松江	2年 藤原 星子	フジハラ ショウコ	女	
20	松江	2年 山本 志保美	ヤマモト シホミ	女	
21	松江	1年 今本 さゆり	イマモト サユリ	女	
22	松江	1年 周藤 志織	ストウ シオリ	女	
23	松江	1年 前田 未来	マエダ ミキ	女	
24	出雲	1年 青木 美弓	アオキ ミユ	女	サブリーダー
25	出雲	1年 石原 葵	イシハラ アオイ	女	
26	出雲	1年 出江 加奈子	デエ カナコ	女	
27	浜田	職員 松井 健	マツイ ケン	男	同行



### 【2011年9月15日(木)11:00～13:30】沿岸部視察

・私が住んでいる地域では津波や地震による被害がなく、毎回テレビでの情報や現地に行かれた人から聞くしか出来ませんでした。今日沿岸視察に行って、実際に自分の目で見たことによって、より現実味を持ちましたし、テレビ等で被災地の情報を目にする時間が少なくなっている今日ですが、まだまだ一部の被災地にはボランティアの手が復興のために必要となることは多いのではないかと感じました。

・沿岸の視察に行った際、崩壊した建物や車を目の当たりにして、ここを故郷とし生活をしてきた人々がいたとは思えないくらいの状況で、胸が痛くなりました。私たち学生ボランティアができることはわずかかもしれないけど、岩手の被災した方々のために精一杯力を尽くそうと決意しました。

### 【2011年9月16日(金)10:00～15:00】

・お婆ちゃんは来られるけど、お爺ちゃんが一人も来られないことにはびっくりしました。おそらく家の中にこもってしまっていると思うのですが、救援物資の配給などの状況もシェアすることができるので、来ていただきたいと思いました。

・引っ越しの手伝いは思っていたよりも重労働でしたが、これまで多くの方がしてきたガレキ撤去に比べれば全然軽い作業なんだろうなということを思いました。津波で元の中学校から変わり果ててしまった学校を実際この目で見て、そこを歩いていたとき言葉を失ってしまいました。この学校にいた生徒、先生はたくさんそこに思い出があったのに、今何を思っているのだろうと思いました。でも黒板に生徒さんが書いていた“つらくても絶対生きる”という文字がとても胸に残り、涙が出そうになりました。子供も大人もお年寄りの方もみんな復興に向け前を向いて歩いているんだということを強く感じさせられました。

### 【2011年9月17日(土)10:00～15:00】

・「かき氷を今シーズン初めて食べた」と喜んでくださいました。また、近所のみなさんの差し入れが本当にありがたかったです。自分達が仮設住宅の住民の人達に元気を与える立場であるのに、逆に自分達が元気づけられたように思いました。

・他のボランティアの方や PTA の方が協力して一緒になって作業するのは手際も良いし、そこでたくさんのお話が生まれるので、すごく良いなと思った。午後の作業で「ありがとう。本当に助かる。」と言われ、来たかいがあったなと思った。

### 【2011年9月18日(日)10:00～15:00】

・今日の活動では、昨日はあまり出来なかったお年寄りの方と会話のできたので良かった。その中で、津波の事や仮設住宅でのストレスの事など、生々しいお話を聞いた。昨日の子供達と同じで、津波のことを自ら話していたので、私たちに話をすることで、少しでもストレス解消に繋がってもらえればと感じた。今日はお年寄りの方にマッサージをしたが、明日もできればと思う。

・今日の午前中は、サロンの宣伝に行ったり、出張サロンに行ったりしたが、「もう少ししたら行くからね」とか「全国から支援してくれてありがたい」とかおっしゃってもらい、自分も県などから支援してもらってボランティア活動に来ているので、改めてしっかり頑張ろうという気持ちになった。明日は活動最終日なのでやり残すことがないようにしたい。

### 【2011年9月19日(月)10:00～14:00】

・雨が降っていたということもあり、外に出られている人が少なかったが、玄関先におられる方々に対して声かけをして、交流が出来た。ラーメンの炊き出しは、とても好評だった。

・今日は初めての地に行きましたが、自分の家に招き入れてくれる人等がいたので、本当に嬉しかったです。そして今回初めてと言っていいほど、地震と津波が襲ってきたときのお話をじっくり聞き、改めて津波の怖さ等を感じました。また、仮設住宅の中に入ったのも初めてですが、部屋は、今まで一軒家に住まれていた方にとっては本当に狭いものだと思います。

また、住民の方の多くは「学生がたくさん来てくれて嬉しい」とおっしゃっていて、これからこの GINGA-NET のお茶っこサロンの活動などが無くなってしまうと、お年寄りの方たちはどうなるのか、元気がなくなったり、外に出ることがおっくうになってしまわないか、と気になりました。

## 【一週間を通しての感想】

・初めて赴く土地で、被災地と言うこともあり、本当に自分が行っても良いのかと疑問に思うこともあった。しかし、実際に活動してみて住民の方々とふれ合うと、ロ々に感謝の言葉をいただいて、応援しに来た僕たちが元気を逆にもらった。メンバーとも協力的に活動でき、意見を出し合い、日々具体的なニーズというものが見えてきた。本当に必要なことは、住民から伝わってくることで行動に移すことだと感じた。そのためには日々の経験をもっと豊かなものにしなければならない。

・子供からお年寄りまでいろんな人と関わって、メディアでは伝わってくるのがなかった被災地の現状を知った。自分たちのところは漁師町で、今回の津波でまちの活気が落ちたとおっしゃっていた。だけど、少しずつ漁師さん達も船を用意して仕事を再開し始めているようなので、活気を再び取り戻せるように今後もこういった活動を継続していく必要があると思った。



©いわて GINGA-NET



写真下：第1クールで出会った仲間たち

写真左上：第2クールで作った寄せ書き

写真右上：第3クールで出会った仲間たち



©いわて GINGA-NET



## (5) 南三陸町「島根県災害ボランティア隊」

主 催：社会福祉法人島根県社会福祉協議会（会長：今岡義治）

受 入 先：南三陸町災害ボランティアセンター

場 所：宮城県南三陸町

活動内容：瓦礫撤去、被災家屋の片付け、側溝の泥出し、草刈り等

期 間：第1クール 2011年10月12日（水）～16日（日）

第2クール 2011年10月19日（水）～23日（日）

### 【行程表】\*各クール共通

第1日（月）	10：00	浜田キャンパス出発～県大公用車で移動
	14：00	いきいきプラザ島根着（受付）
	14：45	出発式
	15：00	いきいきプラザ島根出発～大型バスで移動（車中泊）
第2日（火）	8：00	南三陸町災害ボランティアセンター着
	9：00～16：00	ボランティア活動
第3日（水）	17：00～	宿舎着(食事・宿泊)
	8：00～ 8：30	南三陸町災害ボランティアセンターへ移動
	9：00～16：00	ボランティア活動
第4日（木）	17：00～	宿舎着(食事・宿泊)
	8：00～ 8：30	南三陸町災害ボランティアセンターへ移動
	9：00～15：00	ボランティア活動
第5日（金）	15：00～16：00	南三陸町災害ボランティアセンターへ移動・手続き等
	18：00	南三陸町を出発 ～大型バスで移動（車中泊）
	11：00	いきいきプラザ島根着
	11：15～12：00	解団式
	12：00	いきいきプラザ島根出発～県大公用車で移動
	15：30	浜田キャンパス着

## ◆第1クール

主な活動：漁業復興の手伝い、瓦礫撤去、ゴミの仕分け

キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考
1	浜田	3年 西岡 仕琦	ニシオカ シキ	男	リーダー
2	浜田	2年 矢倉 大樹	ヤグラ ダイキ	男	サブリーダー
3	浜田	2年 山口 真澄	ヤマグチ マスミ	男	
4	出雲	3年 稲田 三菜	イナタ ミナ	女	

### 【2011年10月13日(木)10:00～15:00】

・災害ボランティアに4回目の参加だったのですが、初めての作業でした。漁業復興のために少しでも助けになれたらいいなと思います。未だ家が崩れたままで、ゴミが残っていたのにはびっくりしました。学生と県民のボランティアで良いチームワークができて、スムーズに活動できた。

・ボランティア初日ということで、南三陸町の風景にショックを受けてしまいました。だけど自分が思

っていたよりもずっと町民の方々が復興を頑張っておられ、進行していると感じた。

・こまめな作業で、何度も反復するような作業でした。地盤沈下のため、満潮になると漁場が水につき、作業ができなくなり、少し悔しい思いもしました。ボランティアの方々と地域の南三陸町の方々のチームワークや協力も見られ良かったです。

### 【2011年10月14日(金)9:30～15:15】

・今日は一日、土などを運んだり、ガレキの撤去の作業をしました。現地ボランティアの話によると今の時期はボランティアが減ってきていて、冬が来る前にもっとボランティアに来てほしいとのことだった。自分達ボランティアを良く思っていない人もいることを知りました。一日力仕事をして、気持ちいい汗をかくことができました。県民ボランティアの方々は、人生経験が豊富なため、作業をどうすれば効率がよいかかわかった。

・今日は、定置網の準備をお手伝いしました。本来ならもう始まっているらしいのですが、津波で全て一かららしいです。でもようやく漁業再会のメドがたってきたらしく大変うれしそうでした。漁師にスカウトされました。

・こまめな作業でしたが、地元の方々と協力し、また、いろいろなお話を聞かせていただき、とても良い経験をさせていただきました。ボランティアは、自分が「やってあげている」などと考えるべきではないと思いました。

### 【2011年10月15日(土)10:00～15:00】

・ボランティアセンターの小さな写真展で、当時の震災のお話を聞くことができ良かったです。自分の知らなかったことやメディアではわからないことを聞いたのは非常に貴重な体験になりました。今回活動をした場所は、漁師町でみんな優しい人でした。自分がこの活動を通して感じたことや思ったことをもっと多くの人に伝えなければならないと思う。

・今日の活動では津波の話聞かせてもらいました。実際自分には全く想像のできないことが起こっていました。そんな苦境でも明るく作業されている漁師さんがものすごく印象的でした。

・地域の産業を復活させるための重要な作業に参加させていただき、当時のお話や被害のことなども聞くことができたので、とても良い経験になりました。また、これからももっとこの復興のお手伝いをしたいと思いました。



写真：第1クール浜田キャンパス出発式の様子

## ◆第2クール

主な活動：瓦礫撤去、側溝の泥だし

	キャンバス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考
1	浜田	4年	牛島 耕史	ウシジマ コウシ	男	
2	浜田	4年	門脇 優輝	カドワキ ユウキ	男	
3	浜田	3年	岩田 徹	イワタ トオル	男	
4	浜田	3年	片岡 周吾	カタオカ シュウゴ	男	
5	浜田	3年	嘉本 哲大	カモト テツヒロ	男	
6	浜田	3年	河原 大地	ゴウバラ ダイチ	男	リーダー
7	浜田	3年	近藤 政史	コンドウ マサシ	男	
8	浜田	3年	清水 元貴	シミズ モトキ	男	
9	浜田	3年	高田 有子	タカタ ユウコ	女	
10	浜田	3年	武田 知波	タケダ チナミ	女	
11	浜田	2年	川久 保友里	カワクボ ユリ	女	
12	浜田	2年	田邊 尚子	タナベ ナオコ	女	
13	浜田	2年	保科 由美子	ホシナ ユミコ	女	
14	浜田	2年	吉田 直美	ヨシダ ナオミ	女	サブリーダー
15	松江	2年	坂本 風子	サカモト フウコ	女	
16	出雲	職員	藤原 秀樹	フジハラ ヒデキ	男	

### 【2011年10月20日(木)10:10～15:30】

・正直、7ヶ月前にあった災害でそんなに残骸など残ってないと思っていました。ですが、バス車内から見た光景でその考えは一瞬に変わりました。そして作業中でも、作業をすればするほど、その家の人が使っていたと思われるものがたくさん出てきました。“ツライ”という気持ちも大きかったですが、それ以上に作業を進めて現地の方々に貢献したいという気持ちがあり、作業を熱心に進めることができました。

・被害が大きすぎて、初めは実感が湧かず、淡々と作業をしていたが、被災者の方々が使用していたであろう物が掘り出される度にじわじわ実感が湧いてきた。自分にできることは本当に小さくて無力さを思い知った初日だった。

・目の前の現実に言葉を失いました。ものすごくショックでした。皆さんがおっしゃっていたように、テレビで見るより実際に見ると違うと思いました。スタートしてからなかなかスムーズに動けず、皆さんの足を引っ張るばかりで本当に申し訳なかったです。休憩が終わってからは、自分なりに少しでも動いて作業を進めていきました。男性の方は、重い物を運んでらっしゃって自分にもできると甘く見ていましたが、やってみるとすごく大変でした。明日は、もっと動いていきます！！

### 【2011年10月21日(金)10:00～15:30】

・被災された方（漁師の方）と話をする機会があつて、涙ながらに被災の様子や復興への思いを語る姿を見ていたら、自分が今できる精一杯のことをやっていくことが復興への一番の近道になると感じた。

・昨日よりもスムーズに動き、協力し合うことができた。同じ場所だと言うこともあり、皆コツをつかんでペースも早くなってきたように思えた。昨日やり残した場所のガラス処分などを終え、休憩してからは、泥出しを行った。腰がやられてしまったけど、すごく達成感のある仕事でいい汗をかいて頑張る

ことができた。「ありがとう」という言葉の大事さが身にしみて伝わってきた。これから感謝の心を大切にしたい。ひととおり泥出しが済んで、溝の泥出しに移った。食器など思い出深い品がたくさん出てきて、こんな深くまで眠っているんだなと思い、何とも言えない気持ちになった。被災された方々を思うと悲しくなったりしたが、少しでも役に立てたのかなと思う。

・今日は、昨日よりも慣れ、準備に手間取ることもなかった。スムーズに始めることができたし、手順もわかっていたので、みんなで協力して進めることができました。昨日と同じ場所での瓦礫の撤去作業は、今日で一段落つけて終わりにしたいという気持ちで作業をしました。壊れた橋（国道）の上から、家が建っていた跡を見ると自分達が片付けている範囲の小ささに驚いた。28人がかりで数件の家の一面しかきれいにできていないことで、自分の力の小ささを感じたが、他のボランティアの方々も一緒に活動をしている方々も本当に一生懸命で、小さな事でも自分にできることをやろうと思った。自分がやりたいと思っていた場所はできたので、それは達成感がありました。

### 【2011年10月22日(土)10:00～12:00】

・悪天候の中での作業ということで、同じような作業内容であっても、この3日間で一番大変だった。この3日間を通して、被災地全体から見ればごく一部ではあるが、復興に協力できたことはとても光栄であるが、同時に自分自身の力不足も痛感した。力不足という点は、今から後悔してもどうにもならないので、私は島根でできる協力をこれから頑張っていこうと感じた。

・雨の中、心が折れそうだったのですが、みんなが一生懸命仕事をしていて、私も頑張ることができました。思ったより、雨の中での活動はしんどかったです。しかし、現地の人のため、最終日だったというもあり、必死になっていました。みんな最終日で、気合いが入っていたと思います。道具も足りないし、雨の中という悪条件の中で、みんなで協力し合い声を掛け合っていて、一体感を感じることができました。みんなと一緒に活動できて、とても勉強になったし、楽しく過ごせました。いろんな方に感謝したいです。

・最終日は、生憎の雨で、午前中だけの作業となってしまいました。作業に慣れてきていたので、短時間しか作業できなかったことは残念でした。雨の中で、気温が下がってきて厳しい環境ではあったが、短時間集中してできたんじゃないかと思います。約30人で、2日と半日かけて家一軒の瓦礫を撤去することしかできなくて、本当に微力だなと感じました。しかし、このボランティア活動を続けて行くことで、東北が復興していくんだなと思いました。



写真：第2クール浜田出発時の記念撮影



## 5. 派遣活動以外の取組

### 1. 災害ボランティア活動報告会

- ①「浜田を明るく照らし隊」報告会  
日時：平成23年5月12日（木） 場所：石見公民館
- ②浜田キャンパス学内報告会  
日時：平成23年6月22日（水） 場所：浜田キャンパス ➡ P72 参照
- ③出雲キャンパス学内報告会  
日時：平成23年6月24日（金） 場所：出雲キャンパス ➡ P56 参照
- ④キャンドルナイト（地域密着でごねっと）  
日時：平成23年7月1日（金） 場所：浜田キャンパスカフェテリア
- ⑤浜田市校長会への報告会開催のお願い  
日時：平成23年7月6日（水）9:00～9:30 場所：浜田教育センター
- ⑥川本町三島自治会防災訓練講演  
日時：平成23年7月17日（日）17:00～18:00 場所：川本町三島管理棟
- ⑦島根大学第2回震災シンポジウム（島根大学オープンキャンパス） ➡ P45 参照  
日時：平成23年8月10日（水） 場所：島根大学松江キャンパス
- ⑧浜田高等学校文化祭パネルディスカッション  
日時：平成23年9月6日（火） 場所：浜田高等学校
- ⑨島根県知事表敬訪問  
日時：平成23年9月14日（水）10:40～11:10 場所：県庁知事室 ➡ P59 参照
- ⑩浜田市長表敬訪問  
日時：平成23年10月4日（火）11:00～12:00 場所：浜田市役所市長室
- ⑪浜田市公民館長会への報告会開催のお願い  
日時：平成23年10月7日（金）10:00～10:30 場所：三隅町公民館
- ⑫しまね県民福祉大会  
日時：平成23年10月8日（土） 場所：くにびきメッセ ➡ P46 参照
- ⑬浜田キャンパス学内報告会  
日時：平成23年10月9日（日） 場所：浜田キャンパス ➡ P47、73 参照
- ⑭松江キャンパス飛鳥祭  
日時：平成23年10月15日（土） 場所：松江キャンパス
- ⑮松江キャンパス学内報告会  
日時：平成23年10月21日（金） 場所：松江キャンパス ➡ P74 参照
- ⑯浜田市福祉大会  
日時：平成23年11月27日（日） 場所：いわみーる
- ⑰出雲キャンパスボランティア報告会・企画コンテスト  
日時：平成24年1月18日（水） 場所：出雲キャンパス ➡ P75 参照









## 2. 災害ボランティア活動写真展

- ①浜田キャンパス学内写真展  
日時：平成23年6月22日（水）～30日（木） 場所：浜田キャンパスカフェテリア
- ②学外写真展  
日時：平成23年7月4日（月）～7日（木） 場所：島根県浜田合同庁舎1階ロビー
- ③学外写真展  
日時：平成23年7月11日（月）～15日（金） 場所：浜田市役所1階ロビー
- ④浜田キャンパス・オープンキャンパス  
日時：平成23年7月16日（土） 場所：浜田キャンパスカフェテリア
- ⑤松江キャンパス・オープンキャンパス  
日時：平成23年8月10日（水） 場所：松江キャンパス体育館1階ロビー
- ⑥出雲キャンパス・オープンキャンパス  
日時：平成23年8月20日（土） 場所：出雲キャンパス
- ⑦浜田高等学校文化祭  
日時：平成23年9月6日（火） 場所：浜田高等学校
- ⑧はまだ未来文化祭2011  
日時：平成23年9月24日（土） 場所：浜田市石中央文化ホール1階ロビー
- ⑨浜田キャンパス海遊祭  
日時：平成23年10月9日（日）～10日（月） 場所：浜田キャンパス ➡ P47 参照
- ⑩出雲キャンパスつわぶき祭  
日時：平成23年10月15日（土）～16日（日） 場所：出雲キャンパス ➡ P48 参照

写真：⑤松江キャンパス・  
オープンキャンパス  
における写真展



### 3. その他の取組

- ①松江キャンパス被災地に送る絵本の収集開始  
日時：平成 23 年 4 月
- ②出雲キャンパス学内募金活動  
日時：平成 23 年 3 月  P44 参照
- ③浜田キャンパス学内募金活動  
日時：平成 23 年 3 月～
- ④松江キャンパス・小泉教授が石巻のみちのく八雲会へお見舞い  
日時：平成 23 年 5 月 4 日  P54 参照
- ⑤「浜田を明るく照らし隊」石見幼稚園で紙芝居劇  
日時：平成 23 年 7 月 12 日（火）
- ⑥松江キャンパス・岩田教授が石巻へ絵本を届け、読み聞かせ  
日時：平成 23 年 6 月、8 月  P52 参照
- ⑦出雲キャンパス・落合准教授が郡山市の仮設住宅家庭訪問  
日時：平成 23 年 9 月  P53 参照
- ⑧浜田キャンパス海遊祭で被災地物産の販売  
日時：平成 23 年 10 月 9 日（日）～10 日（月）  P47 参照
- ⑨松江キャンパス飛鳥祭で被災地物産の販売  
日時：平成 23 年 10 月 15（土）～16 日（日）  P47 参照
- ⑩出雲キャンパスつわぶき祭で募金活動  
日時：平成 23 年 10 月 15（土）～16 日（日）  P44・48 参照
- ⑪浜田キャンパス・マフラー作り  
日時：平成 23 年 12 月  P49 参照

## 6. 学生ボランティア活動支援金募金の報告とお礼

### ①街頭募金

日時：平成23年6月25日（土）、26日（日） 場所：一番街プリル本店

### ②浜田市役所へのお願い

日時：平成23年6月28日（火） 場所：浜田市役所地域政策課

### ③浜田地区島根県職員へのお願い

日時：平成23年6月29日（水） 場所：浜田合同庁舎（所長会）

### ④募金活動

日時：平成23年7月11日（月）～15日（金） 場所：浜田市役所1階ロビー

### ⑤島根県庁へのお願い

日時：平成23年7月14日（木） 場所：県庁総務課

### ⑥浜田地区島根県職員からの募金贈呈

日時：平成23年7月19日（火）～25日（月） 場所：各職場

### ⑦浜田市役所からの募金贈呈

日時：平成23年7月21日（木） 場所：浜田市役所市長室

### ⑧島根県職員からの募金贈呈

日時：平成23年7月～8月 口座振込

※その他、大学に直接持ってきていただいた皆様、大学教職員の皆様など、たくさんの方に募金していただきました。



④浜田市役所ロビーでの募金活動



⑦宇津徹男浜田市長から募金を受け取る



## ～ 学生ボランティア活動支援金のお礼 ～

この度の災害ボランティアに関する支援金へのご協力のほど、深く御礼申し上げます。  
夏季休業期間を利用して、島根県立大学3キャンパスの学生84名が、皆様にご協力いただいた支援金を利用し、現地(岩手県大船渡市、釜石市、陸前高田市 等)での活動を行って参りました。皆様からのご協力がなければ、この度のボランティア活動および支援活動の実現はありませんでした。心より御礼申し上げます。

東日本大震災からの復興に関しましては、まだまだ先が見えない状態ではありますが、今後も継続して支援活動を行っていきたいと考えております。具体的には、報告会やイベント等を通しての情報発信や冬季に向けて自分たちが出来ることの模索など、一刻も早い復興に向け、活動できればと考えております。

最後になりましたが、皆様からのご協力、ご支援に、深く御礼申し上げます。今後とも、よろしく願いいたします。

敬具

島根県立大学総合政策学部 (浜田キャンパス)  
学友会第12期執行委員会 委員長 堀 将大  
島根県立大学短期大学部松江キャンパス  
学友会 会長 児玉 大貴  
島根県立大学短期大学部出雲キャンパス  
学生自治会 自治会長 安部 泉美

### 収支報告

平成23年12月22日現在

1,933,361円の支援金をいただきました。

この内、派遣学生103名の負担軽減のため(学生の自己負担額が5,000円となるように差額1万円強を助成金として支給)、1,403,240円を充てさせていただきました。

また、大学祭の報告会、パネルディスカッション、復興支援販売、マフラー製作費等に157,140円を充てさせていただきました。

残額: 1,933,361円 - 1,403,240円 - 157,140円 = 372,981円

今後とも、派遣活動の助成金その他復興支援の活動に充てさせていただきます。

## 7. 学生から

### 私たちの復興支援

出雲キャンパス学生自治会

たたら

副会長 鈿 貴裕

2011年3月11日に東北地方を震源とした大地震「東日本大震災」が起きてしまいました。天災ということで私たちはなす術なく、この震災が起きてしまった事実を甘んじて受け入れるほかありませんでした。その被害は甚大で、復興のためには莫大な労力とお金が必要ということでした。

私たち出雲キャンパスではこの震災の影響を受けた方々が一日でも早く元の生活に戻れるように、ボランティアとして多くの学生が東北地方へ派遣されました。何クールにも分かれ側溝の掃除等をしたとの報告を受けました。私たちはもう一步踏み出す力をと、労力の支援と共に金銭的な支援ができないかと募金活動を始めました。

初めは、出雲キャンパスの事務室に募金箱を設置したところ、279,724円の募金が集まり、日本赤十字社島根県支部出雲市地区（出雲市社会福祉協議会）に寄託させていただきました。その後、震災の悲惨さを忘れてはいけないという意味も込めて出雲キャンパスの大学祭であるつわぶき祭にてボランティアの学生の報告書をまとめたものをパネルで展示。多くの方に震災の影響を知っていただきました。また開催期間の10月15～16日の2日間、学内に4箇所募金箱を設け、募金活動を展開しました。募金額は2,946円集まりました。

このお金は募金をしてくださった方々の日本を、人を愛する気持ちだと受け止め、間違いなく東北へ送らせていただこうと思います。

私たち一人一人ができることはたかが知れています。しかし、だからこそ一人一人が力を合わせることの大切さを思い知ることになるのではないのでしょうか？

東北地方で起きたこの震災を決して他人事だと思わず、これからも学生が力を合わせて東北地方を、日本を元気にしていくことができたらなと思います。



写真：日本赤十字社島根県支部出雲市地区（出雲市社会福祉協議会）へ募金を寄託（左6月、右3月）

## 「復興」の定義

～ 島根大学災害シンポジウム（2011. 8. 10）に参加して～

浜田キャンパス学友会  
執行委員会委員長  
堀 将大

災害ボランティアの現地での活動以降、多くの場所で広報活動もさせていただきました。そのなかの一つとして、島根大学で行なわれた災害シンポジウムがあります。オープンキャンパスと同日に開催されたため、大学生だけではなく高校生にも知っていただく良い機会になったと思います。当日は、パネルディスカッション方式で意見交換や報告を行ないました。パネリストは4名おり、駒沢大学の方と島根大学の方がお1人ずつ、本学からは2名が参加しました。

東日本大震災を受け、私たちがこれからできることやどのように行動していけばいいのか等、今後の活動を中心に話すことができたと思います。映像や現地の画像など、多くの写真をスクリーンに映しながら話を進めたため、一層聴衆をひきつけることができたのではないかと思います。パネルディスカッションの最後には、質問の時間が設けられており、大学生や大学の先生方からも質問を受けました。質問の中には、「いつになれば復興すると思いますか」といったものがありました。

「いつになれば復興するのか」。これは、阪神淡路大震災を地元兵庫県で経験した私にとって、軽く流すことができない質問でした。「本当の復興」なんて、絶対できません。確かに、時間が経てば建物は新設され、職場も生まれ、雇用も増えることはもちろんと言っていると思います。その結果、震災前の生活に、少しでも近づくことができるかもしれません。大きな被害を受けた神戸市を見ても、今では大きなビルが並び、毎日のように人であふれ返っています。しかし、これが「復興」と言い切れるのでしょうか。私はそうは思いません。

復興の定義がどのようなものかはわかりませんが、私の中でのそれは、物質的なものだけではありません。精神的な復興も、私の「復興」には含まれています。住宅が新設され、漁港は以前と変わらない漁獲高を記録したとしても、この震災を機に受けた精神的な被害は、すぐに消えるものではないのです。2012年になっても、その次の年になっても、3.11は来るのです。そのたびに、悲しみにあふれる国民がいることを忘れてはいけません。現に、神戸市でも多くの方が1.17を迎えるたびに、つらく苦しい思いをしています。わずかな揺れでも目が覚める恐怖、失った家や宝物、そして家族。自分を支えてきたモノが、一瞬でなくなった悲しみは、何年たっても失われないのです。

質問をいただいた方に向けて、想いをすべて伝えました。「本当の復興は、永遠にできないと思います」。被害を受けたすべての方の、少しでもお力になれるよう、ここ島根県からでもできることをしていかなければなりません。お手伝いをさせていただくことは、誰にでもできます。まずはこの報告書を読んでください。この報告書が、みなさんの気持ちを少しでも強くする、一つのツールとなれば幸いです。

## 伝言ゲームを支援に

～しまね県民福祉大会（2011. 10. 8）に参加して～

浜田キャンパス学友会  
執行委員会委員長  
堀 将大

本学も秋学期に突入し、年度の後半にも差し掛かりました。夏季休業期間にはいわて GINGA-NET や島根県社会福祉協議会の皆様が企画してくださったプランを利用し、多くの学生が東北の地へと向かいました。島根県から少しでもお力になればと思い、学生一人一人が懸命に活動してきたことと思います。多くの学生が直接的な支援を行っていた期間、私は間接的な支援をさせていただきました。様々な場所で広報活動をさせていただき、老若男女を問わず多くの方に想いを伝えることができました。中でも、しまね県民福祉大会でのプレゼンは強く印象に残っています。この大会に出席されておられたのは年配の方が多く、これまでの学生や高校生向けの報告とは少し違ったものが求められました。

「みなさんは支援と聞いて、何を思い浮かべますか」という質問に、まず挙がったのはやはり「募金活動」でした。そして、募金活動に何度も協力していただけた方ばかりでもありました。もちろん、募金活動は誰もが手軽にできる支援の手段だと思えます。しかし、震災発生後からおよそ半年が経過した今となつては、募金活動に対する熱も冷めてしまうことが考えられました。「また募金か」と思われてしまつては、復興への関心も薄れてしまいます。もっと手軽にできる支援方法はないのか、私は考えました。その結果、「インフルエンサーを増加させること」こそが、誰もができる支援だと行き着きました。

しまね県民福祉大会で私が強く伝えたことはインフルエンサーを増加させることにありました。「インフルエンサー」という言葉を、みなさんにご存知でしょうか。「影響を与える人」という意味を持つこの言葉を、多くの人に知っていただければと思いました。そのうえで、各人がインフルエンサーとして、活動していただきたいと伝えました。というのも、現地で活動した者を通して得た情報を、自分から多くの方に伝えてほしかったのです。伝言ゲームのような流れではありますが、人と人をつなげるきっかけとして、機能するものと考えます。より多くの方に現状を知っていただき、支援させてほしいという意志につなげるからこそ、現地で活動した者の想いです。これほどまでに悲しみにあふれた、未曾有の災害を風化させてはいけません。そのためにも、多くの人に関心を持っていただきたいのです。関心を持っていただいたうえで、自分から、行動に移してほしいのです。

「今日私がここで話したことを、家に帰ってから、家族や友人、自分の周りの人に伝えてください」。これを何度も繰り返しました。多くの方に領いていただき、こちらも感謝でいっぱいでした。少しでも現地の方の力になりたいからこそ、インフルエンサーとして、多くの人に伝えたい。これが、誰もができる簡単な、それでいて人と人との結びつきを生むきっかけとなる最高の支援策ではないかと思えます。今後も、支援させていただこうと思えます。



## 海遊祭で取り組んだ活動～報告会、写真展、物産販売

浜田キャンパス 総合政策学部  
3回生 吉本 拓司

浜田キャンパスの大学祭である「海遊祭」で取り組んだ活動を以下に述べたいと思います。  
10月9日（日）～10日（月）の海遊祭にておこなったことは、次の3点です。

- ①夏季休業中におけるボランティア活動の報告会
- ②本学のボランティアに参加した学生の写真展
- ③被災地物産の販売

①の報告会は、6月に学内向けの報告会を実施しているため、変わった形式を取り入れようと思ひ、第1部を夏季休業中におけるボランティア活動報告、第2部を島根県立大学3キャンパスと山口県立大学の災害ボランティア実行委員会“ぶちボラYP 勇気”とのパネルディスカッションという「2部構成」で行いました。他キャンパスはもちろんのこと、他大学ともボランティアを通して公の場で交流することは貴重な体験となりました。また、山口県立大学は3・11の震災前から岩手県立大学と交流があり今後の情報交換を密にし、お互い協力していくことで組織のネットワークを広げることができるため、友好を深めていきたいです。

②の写真展は、報告会に来場された方に、実際の被災地の状況と私たちの活動の様子を写真で見えていただく目的でおこないました。撮影場所は福島県郡山市、宮城県石巻市、岩手県陸前高田市で、加えて、いわてGINGA-NETプロジェクトの活動様子を展示。写真はボランティア参加者から集め、組織のメンバーの数人で選定し一枚一枚コメントを添えました。どこの写真かをわかりやすくするため地図を同時に掲載し、視覚的に訴える工夫をするように心がけました。目に留まり少しでも私たちの感じた雰囲気をつかんでいただけてたら幸いです。

③の物品販売についてですが、企画の目的は「災害ボランティアの報告会に合わせて、被災地の物産を販売し、収益を販売企業に還元することで復興の力添えをすること。また、商品購入を通して大学祭に参加する学生や地域住民に震災の理解を深めてもらい、今後の支援活動を各自が継続的に続けていくきっかけづくり。」でした。

販売する物品は、岩手県立大学の「地域貢献イベントIPU\*～復興 girls\*～」が被災した高田松原の松を利用して製作した「高田松原キーホルダー」と三陸鉄道関連商品（キーホルダー、せんべいなど）。利益はそのまま復興ガールズと三陸鉄道に還元しました。販売の傍ら、沿岸地域の企業に充てられる募金をお願いしたり、応援メッセージを布製の旗に書いてもらったりもしました。

③に関しては、松江キャンパスで開催された「飛鳥祭」にもブースを設けていただき、販売とたくさんのメッセージの書き込みをいただきました。

以上のようなイベントでの活動は多くの方に震災について改めて考えてもらえる場となる可能性があるため、今後も携わることで、私たちの情報発信に興味を持っていただき、震災のことを忘れないでほしいと思います。

## 大学祭（10月15～16日）における災害ボランティア展示について

出雲キャンパス大学祭実行委員会

みなみ

健康局長 村本 陽

今回の災害ボランティア展示をするにあたっての私の思いは、自然災害の脅威やそれによる被害がどれほどのものであったのか、そして学生が出向いていったボランティアが被災地や被災者の方々に何をもたらしたのか、そこで学生は何を学んだのかを振り返るとともに、多くの人にこのことを知ってほしい、忘れないでほしいという願いでした。

この東日本大震災は、未曾有の被害をもたらしました。亡くなった方、行方不明の方、残された家族、恋人、友人、さまざまな人々が自然の恐ろしさを思い知り、怒り、悲しみ、虚しさに心を痛めたと思います。私はこの事実を決して忘れてはいけない、より多くの情報を発信しなければと強く思い、大学祭という場を借りて、展示をしようと決めました。

展示をするにあたって、ボランティアに向かった学生、計画・実施に携わって下さった先生方、私とともに展示の企画をしてくれた大学祭健康局のメンバー、大学祭本部の皆さんなど多くの方々に協力をしていただきました。

大学祭までの準備期間はとても短く、資料作成にあてる時間は限られていました。夜遅くまで学校に残り、どのようにすればわかりやすく人に伝えられるか、どんなことを知ってもらいたいのかなど、何度も話し合いを重ね、試行錯誤を繰り返しながら、ようやく展示物を完成させることができました。展示物として、ボランティアの日程、現場での様子やボランティアの内容を模造紙にまとめたもの、ボランティア参加者の名簿、参加者の思いや願いを掲示しました。さらに、被災地の様子やボランティアの様子をより伝わりやすくするために、多数の写真をスライドショーとして編集し会場で流し続けていました。

当日、会場に足を運んでくださった方々に話を伺うと、「震災の様子がまじまじと伝わってきてすごく怖かった」、「亡くなった方のことだけでなく残された人たちの思いも考えて、辛くなった」、「学生の取り組みによって勇気づけられた人はたくさんいると思う。ボランティアも簡単ではないけど、助け合いの心の大切さを改めて感じた」など、さまざまな意見・感想を話してくださいました。

反省点としては、展示を見てくださった皆さんの声をもっと聴けるように、アンケート用紙の目印や配置をわかりやすくすればよかったと感じています。また、人手が足りなかったことにより、当日は展示だけになってしまったので、ボランティアに向かった学生に発表をしてもらったり、学びや感想を述べてもらったらもっとわかりやすかったと思いました。

## 手編みマフラーで東北支援

浜田キャンパス  
県大ねっこわーく@島根  
副委員長 石川 世菜

東北地方では連日雪が積もり、寒い時期に入っている。この寒さをどうにか和らげることはできないかと思い、この企画は始まった。また、マフラーの温かさだけでなく、温かい心も届けたいというコンセプトであった。

活動は12月上旬から始まり、最初は広報のためのポスター作り、参加メンバーを集めることから取り掛かった。マフラーを届けることだけでなく、学生に呼びかけることにより、10ヶ月以上経った現在でも支援が継続的に必要であるということを伝えたかった。主に活動はカフェテリアで行った。ねっこわーくのメンバーが作業をしていると、支援をしたかったが中々できないでいたという学生や、東北にボランティアに行った学生など、沢山の友人が集まった。マフラーは、針を使った編み方でなく、段ボールの型の突起に毛糸を通して編み上げていく方法で作った。編み物といえば難しいイメージがあるが、手軽に作れる方法である。

出来上がったマフラーは37本、1月下旬に岩手県陸前高田市のボランティアセンターに送られた。企画の内容は送る前からボランティアセンターと話をしていた。

今回のマフラー作りを通して、ボランティアの難しさを感じた。ボランティアとは、無償であるからこそ責任感を伴い、ニーズに合わなければ意味がない。支援がしたい、心を届けたいというのも自己満足に過ぎないのではないかと言われたこともあった。しかし、何か支援がしたいとアクションを起こしたことは、これからの私たちの継続的な支援活動に繋がる第一歩になった。ねっこわーくではこの名の通り、これからも木の根が地を這うように支援を続けていく。



写真：カフェテリアで作ったマフラー（左）を箱詰めして（右）、陸前高田市へ送った

## 島根浜田から発信する復興支援 —今自分達にできること—

浜田キャンパス  
県大ねっこわーく@島根  
委員長 高橋 勇人

未曾有の被害をもたらした東日本大震災から早くも1年が経過しようとしている。この震災発生を機に島根県立大学では5月～10月にかけて約150名を超す学生が自発的に災害ボランティアに参加し、現地で勢力的に活動を展開してきた。

私自身も6月、8月の2回、現地で活動する機会を得た。初めて現地へ入った6月には、家の基礎や多くの瓦礫を残した街並みが眼下に広がり、街中には住民の笑顔はなかったように思う。8月には、瓦礫が山の様に積まれた町並みに変わりはなかったが、沢山の希望が見えた。それは多くの住民が笑顔を取り戻し、一步一步復興へ歩み出している姿であった。この活動を経て、「今自分にできることは何なのか」を自問自答する日々が続いた。その様な中、同じ思いを持つ学生が次第に学内で集まる様になり、いつの間にか、その輪が広がってきた。そして、震災発生から約8ヶ月後の10月、島根県立大学学友会の特別委員会として「島根浜田を拠点に、草の根の活動で被災地を支援する」という意味を込めて県大ねっこわーく@島根を設立することができた。

委員会の目的は上記にも述べた様に、島根県浜田市から草の根的な活動を行っていくことは勿論のこと、長期的な復興支援の重要性を訴えていくことである。これらの目的を達成するため「企画」「協働」「交流」「報告」を活動の指針に定め、今後活発な活動を行っていくことになる。

「企画」では、浜田からできる復興支援を合言葉に2つの企画を現在進行中である。まず一つ目が、島根からマフラーで東北を温かくしようをテーマに学生有志でマフラーを編み岩手県陸前高田市ボランティアセンターに寄付すること。二つ目が、浜田市の中山間地域で近年問題になっている耕作放棄地で米作りを行い、収穫後寄付すること。

「協働」では、長期派遣を島根県社会福祉協議会などに訴えかけ、共にボランティア活動を継続的に行える場を構築していくこと。

「交流」では、繋がりのある山口県立大学をはじめとする、災害ボランティア活動を行っている各種団体と交流し、支援の在り方を共に考えていく学習の場を構築すると同時に、他地域で災害が発生した際に助け合えるパートナーシップを構築していくこと。

「報告」では、派遣や交流会で感じたことを学内で共有し、多くの学生に現状を把握してもらえらる場を作ること。ひいては、市民の皆さんにも学生の想いを伝える場を設け、学生・市民全体で支援の輪を広げていきたいと考えている。

この様な活動の4本柱を今後忠実に実行していき、地域に根差した活動を展開しつつ地域と地域を繋ぐ役割も共に担っていかれたらと考えている。そして、「自分達ができること」それらをモットーに目的が達成できるように活動を行っていききたい。

最後に、東北地方が一日も早く復興し、日本全体が一「笑」懸命な毎日が送れる社会が早く訪れるように心から願うと同時に、私自身もそんな社会が訪れるまで、活動を行っていききたいと強く考えている。



## 8. 教員から

### 被災地における大学生の役割

浜田キャンパス

総合政策学部教授 井上 厚史

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災に初めて災害ボランティア活動に参加して以来、私は学生たちを引率して被災地の復興支援ボランティア活動に参加してきたが、今回の東日本大震災は空前の規模の大災害であり、現地に行って大きな衝撃を受けた。

目の前に広がる見渡すかぎりの廃墟。海岸線に積み上げられたそびえ立つ城壁のようなガレキの山。持ち主の生死さえ不明ながら、被災直後の姿をとどめたまま道路の端に整然と並べられている「遺失物」としての自動車の長い列。二階建ての家の窓に突き刺さった自動車やトラック、漁船を見ていると、ボランティア活動に参加した誰もが、「この街を復興させることは無理なんじゃないか」と考えたことだろう。

しかし、市役所などの行政の建物が大きな被害を受けて機能を失うなか、石巻専修大学がボランティアセンターとしての機能をはたし、全国から大勢の大学生がボランティア活動に参加したこと、また、岩手県立大学を中心にした「いわてGINGA-NET」が立ち上げられ、被災地の復興支援に乗り出したことなど、今回の大災害を機に、被災地における大学がはたす役割の重要性が改めて証明されたのではないだろうか。

被災地における大学生の役割は、本当に大きなものがある。自分の孫のような若者が、遠く離れた地方からボランティアに駆けつけてくれただけでも、お年寄りには彼らが「希望の光」のように見えたことだろう。また、社会人に比べて自由時間が多く、長期的なボランティア活動が可能になるだけに、被災地との信頼関係の構築という面でもメリットは大きい。さらに、最近の大学生はパソコンや携帯などのIT機器の扱いにも強く、情報発信やボランティア・コーディネートにおいても欠かせない存在になってきている。

ただ、1つだけ忘れないでほしいのは、被災地の復興は簡単にはできないということだ。肉親や子どもを亡くし、住み慣れたわが家を奪われ、集落全体が崩壊し、何もかもすべてを失ってしまった方々もいる。過酷な現実と向きあい、甚大な被害に遭いながらも懸命に生活を取り戻そうとする人たちの心情は、一度ボランティア活動に参加しただけで理解できるような生やさしいものではない。震災から月日が経過するにつれ、現実の辛さや厳しさは肌身にこたえてくる。

被災者の悲しみにどこまで寄り添うことができるだろうか。被災地の復興のために何ができるだろうか。そうしたボランティアの思いが結集することによって、被災地は一步一步復興へと足を踏み出すことができる。今回、ボランティア活動に参加した学生だけでなく、本学の多くの学生がそうした思いを共有し、今後とも長期にわたって、遠く離れた島根の地から応援のエールを送り続けたい。



## 石巻の避難所で読み聞かせ

松江キャンパス

総合文化学科教授 岩田 英作

2011年6月18日、19日の2日間、宮城県石巻市内の避難所を訪れ、子どもたちに絵本を届け、読み聞かせの活動を行なった。松江キャンパスには絵本専門の図書館「おはなしレストランライブラリー」がある。このライブラリーでは、西日本から被災地の子どもたちに絵本を届ける活動を4月から行なってきた。

多くの一般の方々から4千冊を超える絵本の提供を受け、仙台のNPOを通じて東北地方の被災地に届けることができた。この活動に取り組むうちに、自分自身、被災地の子どもたちに直接絵本を読みたいと思うようになり、絵本をバッグに詰めるだけ詰めて出かけた。

現地でお世話になったのは、NPO石巻こども避難所クラブ「にじいろクレヨン」代表の柴田滋紀（しげき）さん。柴田さんご自身も家が流され避難所生活を経験した被災者のひとりだ。



写真：石巻・絵本読み聞かせの様子

石巻市内にある避難所は僕が行った時点でも90箇所以上にのぼる。そのうち、僕が柴田さんとまわったのは被災者宅も含めて9箇所、最初に向かったのは石巻高校内にある避難所だった。事前の想像では、大勢の子どもたちを前に絵本を読み聞かせるシーンをイメージしていたのだが、現実にはそうはいかなかった。校庭に3人のちびっ子を見つけるやいなや柴田さんが走りだし、いきなり追いかけてこの始まりである。さて次は肩車、次はサッカーと、事の成り行きに戸惑いながら、絵本を入れたトランクはとりあえず校庭の隅に置いて、汗まみれ砂埃まみれで走り回った。

その後まわった避難所でも、基本的にはこれと似たり寄ったりだった。僕は子どもたちと走り、つかまえてちょちょをし、ボールを蹴り、投げ、ぶつけられ、また追いかけてまわし、そしてほんのひととき、絵本を読んだ。僕はかなり早い段階で絵本の読み聞かせにこだわることはしなくなった。子どもに無理やり絵本をおしつけるなんて馬鹿げているし、それに、絵本を介さなくても、子どもたちと僕のあいだに何かが通い合うのを感じることができた。子どもが風船に水をはちきれんばかりに入れて投げてよこす。受け取った僕の手元で水風船が破裂しシャツが水浸しになる。子どもが大笑いをし、僕もこらと言いながら笑った。それでよかったと思っている

12月になって、石巻のにじいろクレヨンからクリスマスカードが届いた。避難所が解散した今、にじいろクレヨンの活動は仮設住宅で続けられている。「日々の活動から強く感じるのは、子どもたちの健やかな成長のためには今だけでなく長い期間にわたり継続した見守りが必要だということです。」カードの言葉は、子どもが描いたサンタさんの絵と共に、つよく僕の心に響いている。

## 福島県の仮設住宅における家庭訪問で感じたこと

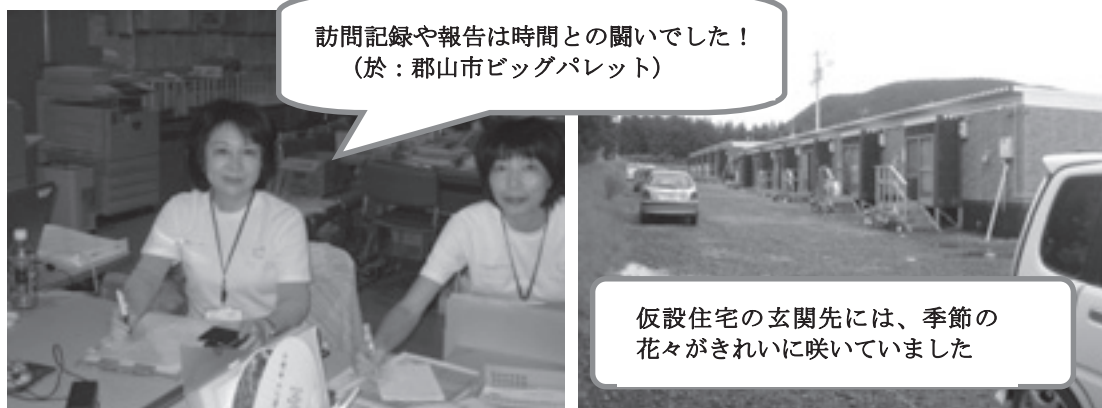
出雲キャンパス  
専攻科准教授  
落合 のり子

せいるか

平成 23 年 9 月、ボランティア休暇を活用して「きぼうときずな」聖路加看護大学福島県災害支援プロジェクトに参加し、福島県郡山市の仮設住宅で家庭訪問をしました。このプロジェクトは、郡山市では福島県双葉郡富岡町の支援活動を中心に行っています。富岡町は人口約 1 万 6 千人で、東京電力福島第二原子力発電所があり、避難地域に指定されているため全住民が全国各地に避難しています。訪問当時は、郡山市ビッグパレットに仮役場が設置されており、我々支援スタッフ(保健師)は富岡町健康づくり係の保健師 4 名と連携しながら 1 日 1 地区ずつ 2 つの仮設住宅で家庭訪問を実施しました。

訪問目的は継続フォロー者の健康相談と新規入居者の健康状態把握で、当日の対象者は直前(前週)にその地区を訪問した支援スタッフによって、すでに選別されていました。仮設住宅によっては仮設診療所や談話室が設けられ自治会も設立されるなど、地域に必要な生活基盤が整いつつある状況であることが分かりました。どちらの仮設住宅でも社会福祉協議会の生活支援員さんが熱心に住民の支えとなって活動をしておられ、初対面の我々にも快く協力していただき、頭が下がる思いがしました。実際に訪問してみると、認知症が進み食事が作れない独居のお年寄りや、アルコール依存により引きこもりがちな男性、出産予定間近の妊婦さんなどがおられました。現状で利用できる医療・保健・福祉サービスを現場で確認し、少しでも安心した生活ができるようサービスに繋いでいきました。独居のお年寄りの中には、同じ仮設住宅内で友人を見つけ、お互いの家を行き来して支え合っている 90 歳代の人もおられ、前向きな姿勢に心を打たれました。

今回訪問した家庭には、原発事故という人的災害によって避難先を 7~8 箇所も変わり、やっと仮設住宅に入居して落ち着いたという方々が少なくありません。生活環境も変わり、先が見えない暮らしが続いています。心理面でも「不安」「不満」「孤立感」がつのり、自尊心が傷ついていることも推察されます。そうした「心」を支援する前提として、最低限の生活に必要な衣・食・住の環境を整備するにとどまらず、生活基盤(仕事)や生きがい(家族や友人、近隣とのつながり)を充実させる施策が求められていると強く感じました。



## 被災地支援活動の報告

松江キャンパス 地域連携推進センター副センター長  
総合文化学科教授 小泉 凡

昨年5月の連休に、「みちのく八雲会」の皆さんのお見舞いに出かけた。同会は2002年に宮城県で設立。小泉八雲原作の津波から人々を救った庄屋の物語「稲むらの火（「生き神様）」の紙芝居をDVDにして宮城県内の小学校に配布する活動をしてきた。ちなみに”tsunami”という言葉もこの作品ではじめて世界へ知らされた。

5月4日午前、松江の銘菓・お茶・コーヒーを目いっぱい詰め込んだキャリーバッグを引いて石巻着。門間光紀会長を含め8名の会員が集まってくださった。とにかく話を聞いてもらうだけでいいので、顔を見せてほしいと言われたのが訪問のきっかけだった。そのうち6名までは家や車や愛犬を失っている。集まった皆さんからこんな言葉を聞いた。「物を追いかけてきた価値観が変わった」「震災の日を境にみんなが優しくなった」。なかでも「平成23年3月11日は私にとってリセットの日」という言葉は心に響いた。そう語った青山さんは昭和23年3月11日生まれ。心待ちにしていた誕生パーティーの支度を孫たちと始めた矢先に津波に襲われたという。



石巻の被災者の方たちと  
(2011年5月4日)



瓦礫に覆われた門脇小学校  
(石巻市南浜、2011年5月4日)

その後、被害の大きかった南浜地区へ赴く。瓦礫の中で、門脇小学校と墓地を見つけた。9割方の墓碑が倒れていた。でもそれを起こして地蔵やこけしが奉納される風景があった。祖先信仰の根強さを感じた。また東松島では沼沢地と化した松林で蛙の声を聞いた！新しい命の力強さに嬉し涙が溢れた。

震災から2カ月足らずだが、大惨事をしっかりと受け止め、原点回帰して「自然との共生」という方向にゆっくりと力強い歩みを始めた被災地の方々にむしろ勇気づけられた。同時に、公的な義捐金はその時点でまだほとんど生かされていないという不条理な現実も知らされた。そして被災者の方たちから、義捐金は公的機関ではなくピンポイントで避難所等を運営するNPO団体におくってほしいと懇願された。また、不安を抱える子供たちは思いきりハグできるおとなを求めているので、ぜひ、学生さんに来てほしいとも言われた。

さて、松江キャンパス地域連携推進センターでは「ボランティア活動のしおり」を入学時に配布し、ボランティア保険加入の促進をはかり、ボランティア説明会を開催するなど、学生ボランティア活動の推進を日頃より重視してきた。災害ボランティアについては、法人の指示に基づき、教務学生課より島根県の「災害ボランティア隊」と「いわて GINGA-NET プロジェクト」の情報を全学生にメール配信で周知したところ、予想以上の反響が得られた。結局前者に6名、後者に18名の計24名（男子：3名・女子21名）の学生が参加した。（時期：8月17日から10月23日まで）さらに、10月15日と10月21日には松江キャンパスでボランティア報告会を開催した。学生たちの災害復興支援への関心の高さと実践力に心強さを感じた。

また、私ごとながら、ジョン・ニアリ駐日アイルランド大使に促され、12月10日に、松江で、料理と音楽を通して現代のアイルランド文化を紹介する被災地チャリティーイベントを企画し、収益金を宮城県のNPOに届けることができたのもささやかな年末の喜びであった。



## 学生による東日本大震災ボランティア活動について思うこと

浜田キャンパス 学生生活部長  
総合政策学部教授 小林 博

私は学生生活部長という立場にあったため、出発前のオリエンテーション、出発式、報告会等、学生諸君の東日本大震災ボランティア活動に関わる機会が多くあった。以下それらを通し感じたところを述べてみたいと思う。

東北地方を襲った巨大地震、大津波、そして原発事故は同地方に壊滅的な被害を与えただけに、組織立ったボランティア活動が可能となるには一定の時間が必要であった。当初は、余震による二次災害の危険があり、現地の受け入れ体制も整ってはおらず、瓦礫の中での作業等安全面での懸念もあった。しかし、学生諸君は「少しでも早く現地の状況を自分の目で見、被災された人々を支援したい」との若い純粋な気持ちを抑えられないようでもあった。一応条件が整い、最初のグループが出発したのは5月6日であった。

ボランティア活動が軌道に乗り始めたのは、島根県社会福祉協議会の主催により島根県民を対象とした「島根県災害ボランティア隊」の募集が開始されてからであった。同プログラムでは、島根一現地間の交通や宿泊施設の確保、受け入れ組織との調整等を協議会でやって頂き、県立大学の学生の派遣も可能となった。まず5月から6月にかけて、県立大学からは4つのグループが参加した。夏休みに入ると、同プログラムへの参加希望は大きく増え、松江、出雲キャンパスからも多数の参加があった。その後10月にも派遣があり、5月から始まった県立大学生によるボランティア活動への参加は実に152名に達した（うち102名は浜田キャンパス学生）。その他協力頂いた教職員の参加もあった。

なおこうした学生ボランティア活動も、浜田市民の皆様、浜田市役所や島根県庁の職員の方々をはじめとする多くの人々の募金等による支援があつてはじめて可能となったものであった。

活動の様子は毎日、学生リーダーや引率の教職員からメールで送られてきた。当初は、瓦礫の撤去作業等体力を要する作業が多かったが、徐々に、お年寄りや子供たちを励ますサロン活動等が増加していった。学生諸君はこのように被災地のさまざまな人々に直接触れ、話し合い、励ますことにより多くの貴重なことを学んだことと思う。

活動を終えてから大学では参加した全学生による報告会が行われたが、移動日を含め1週間程度の活動ではあったが、参加した各学生が人としてひとまわり成長したと強く印象付けられたものである。

今回の大震災は未曾有の規模であっただけに、これからの支援活動のあり方も、現地へ赴いての支援だけでなく、全国各地においてさまざまな形で行われていくことが必要である。学生諸君も現地の実地の状況を多くの人に理解して頂くことの重要性を十分認識しており、学内外で報告会や写真展開催等による情報発信に積極的に努めてきている。

最後に、被災地より遠く離れたこの島根県から、これ程多数の学生が自発的に支援活動に駆け付けたことに対して、改めて心から敬意を表したい。

## 9. 事務局から

### 出雲キャンパスの取り組みについて

出雲キャンパス  
管理課長 青木 健

看護学科3年次生の中河美帆さんが、平成23年6月13日から派遣される島根県災害ボランティア隊第5クールに個人として参加することを連絡してきたのは、出発直前のことでした。東北までの移動手段と現地での宿泊場所の確保はできていることを知り、少し安心しました。しかし、東日本大震災から3か月以上たった時期とはいえ、まだライフラインの復旧状況などの詳細な現地の情報が伝わらず、また余震は収まる気配もなく続いていました。出雲キャンパスで支援できることはないかと考えた結果、安全にボランティア活動ができるように、ヘルメットやゴーグルなどの作業グッズを貸与することとしました。

災害ボランティア活動を終えた中河さんによる、災害ボランティア参加報告会を開催したところ、学生や教職員が約50名参加し報告に聞き入りました。

宮城県石巻市でガラス片や重油が混じった汚泥の撤去活動を行ったそうです。

中河さんは、「これまでボランティア活動の経験が全くなく、自分にどれだけのことができるのか不安でした。実際に現地へ行き、活動できたことは、とても良い経験となりました。現地の方々やボランティア仲間、お礼のお手紙をくれた石巻市の小学生など、人と人との繋がりが一番の宝物です。まだまだ被災地ではがれきの撤去などの人手が足りません。これからも継続した支援が必要だと感じました。」と、写真や資料を交えて報告してくれました。

現地での作業内容や作業での必需品などの説明だけでなく、長距離バスで移動する時の工夫や食事の調達手段など、災害ボランティアに参加する時に見落としがちな点も含めて詳しく話してくれました。

中河さんが先陣を切って災害ボランティアに参加したことにより、多くのノウハウを得ることができました。以後、本格化する出雲キャンパスの災害ボランティア派遣にとって、大いに役立つことになったのは言うまでもありません。



写真: 報告する中河美帆さん(6月24日・左)と、出雲キャンパスで用意した作業グッズ(右)



## 震災ボランティアへの学生派遣

松江キャンパス

教務学生課長 吾郷 隆史

松江キャンパスからは、瓦礫撤去等の派遣活動に9名、仮設住宅でのサロン活動を中心にした「いわて GINGA-NET プロジェクト」（プランⅡ）に18名、合計27名（延べ男子3名、女子24名）の参加がありました。

教務学生課では、各クールの出発までに、浜田キャンパス地域連携推進室、島根県社会福祉協議会と連絡をとりながら、支給品、貸与品の配付や携行品の連絡、気温、作業内容などの現地の状況について情報提供すると共に、松江キャンパス内での出発式を行いました。

当初、松江キャンパスからは2～3名程度の参加を予想していましたが、学内一斉メールにより呼びかけたところ、思いのほか多くの方から反応があり、被災地支援に対する関心の高さが伺われました。

しかし、送り出すにあたっては、片道約18時間のバス行程、現地での二次災害の可能性、プランⅡの宿泊場所である体育館での集団生活など、特に健康管理面についての不安材料も多く、各クールが帰松する度に、教職員一同安心する状況でした。

ボランティアから帰った後は、参加前より自主的かつ積極的に行動できるように見受けられ、やはり現地で活動して、いろいろな感じられることがあったようです。

教務学生課では出発準備段階での側面的な支援しかできませんでしたが、大学祭でのボランティア報告会の企画・開催や、参加した方から「松江キャンパスの教職員も是非参加すべきです。」と勧められる場面もあり、また、2回目の参加を希望する方も多く、皆さんが急に成長したように感じられ、大変うれしく思いました。



上写真：松江キャンパスでの出発式



下写真：バスに乗り込みいよいよ出発です

## 学生の安全確保のために

浜田キャンパス

地域連携推進室 岡崎 巧

地震・津波により倒壊した建物などの瓦礫の処理に際しては、誤って釘等を踏み抜いたり、落下物にあたりたり、多くの危険を伴うものである。

そこで、学生が活動する様々な作業シーンを想定し、作業時の事故等防止のため、また安全確保を図るため、大学として以下のボランティア装備品を準備し、貸与、支給した。

あわせて、あつてはならない万が一のことに備え、ボランティア活動保険（天災対応）に加入し送り出した。結果として、学生が無事に帰って来てくれたことに感謝している。

### 【ボランティア装備品】



▼ヘルメット



▼キャップ



▼ビブス



▼タオル



▼踏み抜き防止安全長靴



▼防塵防臭マスク



▼ゴーグル



▼ゴム長手袋



写真：浜田キャンパスの出発式で、ヘルメット、ビブス、キャップを着用した参加者（8月17日）

## 知事表敬訪問（2011. 9. 14）

浜田キャンパス

総務課調整監 土井 功造

現地でのボランティア活動に参加した学生7人（浜田キャンパス3人・松江キャンパス2人・出雲キャンパス2人）が、9月14日（水）、溝口知事を表敬訪問し、現地での活動内容や今回の活動から学んだことなどを報告しました。

学生からは、がれき撤去にあたった状況や、仮設住宅で住民方との交流サロンの運営を手伝った様子等を報告し、現地に行く前と参加後の自身の考え方に変化があったこと、更には、震災の記憶を風化させないためにも、ボランティア参加者が自ら感じたこと、経験したことを一人でも多くの人に伝えていきたいということを知事にお伝えしました。

報告を受けた知事からは、労をねぎらっていただき、「県も支援をするので、皆さんもさらに支援の輪が広がるよう活動をしてほしい」と応えていただきました。



写真：  
溝口善兵衛島根県  
知事に報告（上）  
したあと、知事と  
記念撮影をする学  
生たち（下）

## 日常と非日常の狭間で感じたこと

出雲キャンパス  
看護学部等設置準備室  
藤原 秀樹

松江を出発して約 18 時間、災害ボランティア隊を乗せたバスが三陸の山あいを縫うように下っている時だった。突然車窓の視界が開け、地肌が剥き出しになった土地と、押し潰された消防車・救急車を含む多数の車輛の残骸が目飛び込んできた。それまでざわついていた車内は一瞬で静まり返り、皆、目の異様な光景に言葉を失っていた。

町の中心部に入ると、病院と数棟のアパート、そして鉄骨のみとなった町の防災対策庁舎以外に視界を遮るものは殆どなく、平地は見渡す限り更地と化していた。テレビでもたびたび報道された戦争映画のセットのような光景を目の当たりにすると、それをすぐに現実のものとして受け止めることが出来ず、自分の中で混乱しているのが分かった。

現地では、同じ場所で 3 日間、瓦礫の撤去作業を行った。たった 3 日間、しかも手作業であったため、当然のことながらできることは限られていた。作業内容だけを捉えれば「果たして被災地のためにどれだけ役に立ったのだろうか」と、達成感よりも無力感や歯がゆさの方が強い。

しかし、現地で見えて感じたことは一生忘れることはないだろう。撤去作業中に何度も「ここにいた人は助かったのだろうか」「自分なら逃げることが出来ただろうか」「もし家族が行方不明になったら」「もし自宅が流されたら」「もし仕事を失ったら」・・・などと思いを巡らし、そのたびに何とも言えない喪失感、絶望感に襲われた。今当たり前のように過ごしている日常がいかに幸せなことで、また、その日常は瞬時に非日常に変わるかもしれないということを実感することができただけでも、災害ボランティア隊に参加した価値は十分にあったと思う。

今後は、被災地に関心を持ち続けてもらえるよう、現地で見えて感じたことを多くの人に伝えていきたい。そして、自分自身も何らかの形で継続して被災地の支援に関わっていきたいと思う。

あの日から、もうすぐ 1 年。改めて、幾万の犠牲者、そして後輩の冥福を祈る。



写真：アパートの屋上に取り残された車（10月19日）

追記 災害ボランティア隊の参加者 27 名中、15 名は県立大学の学生であった。学生達は、泥だらけになりながら作業時間ギリギリまで黙々と瓦礫の撤去を行い、作業の前後には、誰に言われるでもなく、率先して活動隊の荷物を運ぶなど、その真摯な取り組みには目を見張るものがあった。別の参加者からも「正直、学生さんがここまでやるとは思わなかった」と言われ、同じ大学の職員として学生達を頼もしく、かつ誇らしく思った。



## 災害ボランティアに参加して～学生支援担当者の立場から～

浜田キャンパス  
教務学生課 松井 健

2011年3月11日（金）一般選抜後期試験を翌日に控えた午後3時過ぎ教務学生課長から「テレビをつけろ」の声と同時にテレビのスイッチを入れた。そこには、現実の事とは思えないような光景が…。職員全員の手は止まり、今何が起きているのかわからない状況であった。しかし、教務学生課長から、学生の安否確認の指示が飛び、愛知県以東の出身者や関東地区で就職活動している学生のリストを作り、手分けして学生への電話連絡が始まった。これが、東日本大震災発生時の教務学生事務室の状況であった。

さて、2011年5月から10月末までの間に、延べ152名という多くの県大生が被災地に赴きボランティア活動を行うに至ったのは、4月下旬に学友会執行委員会のメンバーからゴールデンウィークに被災地で支援がしたいと相談があったことが始まりである。この時、学生からの熱い気持ちに何とか力になりたいという思いと、余震、放射能による2次災害の危険性やボランティアの受入先や宿泊先が決まっていない中、被災地に行っても迷惑をかけるだけにならないかという心配があり、たくさんの課題をクリアするように厳しく指導せざるを得なかった。

しかし、この学生の熱い気持ちが、学長を始めとする大学幹部教職員を動かし、島根県社会福祉協議会が主催する「島根県災害ボランティア隊」にたくさんの学生を参加させていただくことになった。

私も2度学生と一緒に被災地に行く機会を与えていただいた。現地での活動は、実質3日～4日という短い期間であったが、全ての学生にドラマがあったように思う。一緒に参加した県民の方にスコップの使い方を教わったり、他大学のボランティアを行っている学生に刺激を受けたり、被災された方と直接ふれあい気持ちを共有することができたりもした。また、自分の無力さに落ち込んだり、「ありがとう」という感謝の言葉に感動したり、何気ない日常が幸せだと気づかされたりした。今回のボランティア活動に参加した学生は、たくさんの人に支えられて生きていることを感じて帰ってきたのだと思う。

私が、ボランティア活動に参加して一番印象に残っていることは、岩手県立大学社会福祉学部の山本克彦先生が、いわて GINGA-NET プロジェクトの最終日に「学生のやりたいことを支援できなくて、何が大学だ。」と涙ながらに言われたことである。この夏、全国146校1,086人の学生を被災地に受け入れて活動するということは、大変な責任を負うことになり、関係機関との調整も大変であったことが理解できた。私自身、学生支援担当者として、無鉄砲で未熟な学生が、さまざまな壁を乗り越え成長していく姿を見ることができ、やりがいを感じることができた。

今回、学生がたくさんの人を巻き込み動かしていくところ見て、学生の魅力を再認識させられた。これからますます地震関連の報道等が減り、注目度が下がってくる中、被災地の状況を肌で感じた学生による情報発信や支援活動が被災地にとって大きな力となる。これからも学生の活動を支援し、暖かく見守っていきたい。



## ※最新情報：2月の派遣活動の概要

### 南三陸町「島根県災害ボランティア隊」

主 催：社会福祉法人島根県社会福祉協議会（会長：今岡義治）

受 入 先：南三陸町災害ボランティアセンター

場 所：宮城県南三陸町

活動内容：瓦礫撤去、被災家屋・店舗の片付け等

期 間：第1クール 2012年2月18日（土）～22日（水）

第2クール 2012年2月24日（金）～28日（火）

#### ◆第1クール

キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考
1	浜田	2年 岩本 卓也	イワモト タクヤ	男	サブリーダー
2	浜田	2年 佐竹 亮祐	サタケ リョウスケ	男	リーダー
3	浜田	1年 岩谷 直哉	イワタニ ナオヤ	男	
4	浜田	1年 岡本 拓郎	オカモト タクロウ	男	

#### ◆第2クール

キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考
1	浜田	2年 石橋 佳樹	イシバシ ヨシキ	男	サブリーダー
2	浜田	2年 小川 千尋	オガワ チヒロ	女	リーダー
3	浜田	2年 金山 豪志	カネヤマ ツヨシ	男	
4	浜田	2年 三原 緑	ミハラ ミドリ	女	
5	松江	2年 辻畑 裕子	ツジハタ ユウコ	女	
6	松江	1年 石川 ひろみ	イシカワ ヒロミ	女	
7	松江	1年 澤田 春菜	サワダ ハルナ	女	
8	出雲	3年 稲田 三菜	イナタ ミナ	女	

区 分	活動期間	全参加者数	3キャンパスの学生参加者計	浜田Cの学生	松江Cの学生	出雲Cの学生	備考
(6) 南三陸町「島根県災害ボランティア隊」 (島根県社協主催：一般県民を対象)		53	12	8	3	1	男6女6
活動場所：宮城県南三陸町	第1クール 2月18日(土)～22日(水)	27	4	4	0	0	
活動内容：がれき撤去、被災家屋の片付け等	第2クール 2月24日(金)～28日(火)	26	8	4	3	1	

【参加学生内訳、（ ）内は実人数】

	1年生		2年生		3年生		4年生・専攻科		合 計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男女計
浜田	5 (4)	8 (6)	23 (18)	13 (11)	42 (29)	11 (11)	4 (3)	4 (4)	74 (54)	36 (32)	110 (86)
松江	2 (2)	18 (16)	1 (1)	6 (5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (3)	24 (21)	27 (24)
出雲	0 (0)	12 (12)	2 (2)	6 (6)	0 (0)	4 (3)	0 (0)	3 (3)	2 (2)	25 (24)	27 (26)
計	7 (6)	38 (34)	26 (21)	25 (22)	42 (29)	15 (14)	4 (3)	7 (7)	79 (59)	85 (77)	164 (136)
	45 (40)		51 (43)		57 (43)		11 (10)		164 (136)		

参考

# 資料集

## — 目次 —

○ 浜田キャンパス「学報」抜粋	64
○ 松江キャンパス「のんびり雲」抜粋	67
○ 災害ボランティア活動等の記録	70
○ 学内報告会の概要	72
○ 文部科学副大臣通知	76
○ 浜田キャンパス通知	77
○ 公立大学協会の調査結果より	78
○ 島根県災害ボランティア隊の概要	83
○ オリエンテーション資料抜粋	86
○ いわて GINGA-NET プロジェクトの概要	94
○ 新聞記事より	100

## 東日本大震災と大学生

教授 井上 厚史

3月11日の東日本大震災からすでに6ヶ月が経過した。半年後となる9月11日には、各種メディアが遅々として進まない復興への足取りや深刻な放射能汚染の現状を報道していた。そんな中、多くの家族や友人を失いながらも死者への弔いと復興のために、瓦礫と化した街の中で夏祭り実施に懸命に取り組む宮城県の被災者の姿に私は痛いほど胸が絞めつけられた。死者行方不明者が2万人にもものぼる空前の大災害を前にして、「自分に何ができるのか」と自問された方も多いただろう。

そんな中、島根県社会福祉協議会の全面的支援および岩手県立大学 GINGA-NET との連携により、5月6日～9月20日にかけて、のべ133名の本学学生（浜田キャンパス85名、松江キャンパス23名、出雲キャンパス25名）と7名の引率教職員が遠く離れた宮城県や岩手県にまでボランティア活動に参加したことは、特筆されてしかるべきだろう。

本学は2000年の開学以来、被災地支援のボランティア活動に学生が積極的に参加してきた。2000年10月鳥取県西部地震、2004年10月豊岡水害、同年11月新潟県中越地震、2006年7月出雲水害、2009年8月佐用水害など、小さな公立大学としては異例ともいえる参加実績を持っている。今回、そ

こに新たな実績が加えられた。ほとんどの学生が初めての災害ボランティア活動だったにもかかわらず、現地スタッフと協力しながら規律正しく活動し、被災者と親身な意思疎通をおこなってきたことが、学生の口から次々と報告された。

被災現場には異臭が漂い、粉塵が舞い、マスクを付けた重装備での炎天下の活動は困難を極める。また、全国からボランティアが結集する被災地には、盗難や詐欺などの不祥事も珍しいことではない。そんな過酷な状況が待ち受ける被災地に、往復3000キロを要する遠方から多くの若い大学生が駆けつけたことは、被災地に大きな勇気を与えたのではないだろうか。

しかし、今回の被害はあまりに大きく、復興にはこれまでとは比べものにならないほどの時間を要すると言われている。これから被災地は長く厳しい冬を迎える。体育館や公民館に避難されている方はもちろん、仮設住宅にいらっしゃる方も、厳寒の中でどうやって生活するのか、不安に襲われている方も多いただろう。私たちは再び「自分に何ができるのか」と自問しなければならないのかもしれない。

夏期休暇中に、キャンパス内である学生に出会った。その学生はすでに2回「島根県災害ボランティア隊」として被災地に足を運んでいた。「これからどうする？」と尋ねると、「チャンスがあれば、また何度でも支援に行きたい」と元気よく話してくれた。情けは人のためならずと言うが、大学としてこうした熱い想いを持った学生を支援す

ることはできないだろうか。彼らの人間的成長を支援することこそが大学の使命であり、そのために知恵を絞ることこそがわれわれの任務だと思われてならない。



## 災害ボランティアに参加して

総合政策学部 3回生 仲宗根 大輔

3月11日に発生した宮城県沖の地震のニュースを見て、すぐに16年前を思い出しました。

神戸に大地震が起こり、被災しました。当時、全国のボランティアの方々が兵庫に来ていただき長期にわたり支援していただいたおかげで、現在ではほとんどが復興しています。神戸を助けてもらったぶん、今回は自分が現地にボランティアの身として行って何か支援したい。その思いから現地に行くことを決意しました。

5月に福島県郡山市、宮城県石巻市と続いて入りました。テレビなどメディアからの情報である程度は分かっていたつもりでしたが、実際に現地に入ってみると、全く雰囲気が違いました。津波が襲った町はそれでも現地の人々は自分たちで家具撤去をしていました。がれき撤去のための重機が入るのも順番待ち。2カ月経っていても、手つかずの状態の場所もありました。水産加工工場から流れ込んだ鮮魚の腐敗臭。メディアの情報だけでは分からず、現地に行ったからこそ見えてきた事実もたくさんありました。9月に入り、現地でのボランティアに対するニーズは震災発生当初と比べると大きく変わってきていました。東北3県のがれき撤去率は80%を超え、半年たったころになるとニーズとして目に見えない被災者の方々の心のケアに重点を当てら

れるようになっていました。実際に岩手県釜石市で活動した際にも、仮設住宅内に設置されている共同談話室でのサロン活動を行ないました。避難所から仮設住宅への引っ越しが完了し、メディアは東日本大震災の事をあまり取り上げなくなりました。ただ、現状としてあるのは仮設住宅の中での近所づきあいが無くなってしまい、ずっと家に閉じこもってしまう方もいらっしゃるのです。つまり、我々ボランティアに与えられたニーズというのは仮設住宅内での「新たなコミュニティ作り」でした。たくさんの高齢者の方とお話したり、現地でたくさん子どもたちを見ました。みんないい笑顔をしていましたが、余震が起こった瞬間に一気におびえた表情になっていました。子どもたちが地震の事を話したりしているときに、16年前の様子が目に浮かびました。いつも通っていた幼稚園が倒壊してしまい、いつも遊んでいた公園には突如として仮設住宅が建ち、3歳であった私自身も自衛隊の給水車まで水をもらいにいったこと。いつも暮らしていた街並みが一変した姿が一気に頭の中によみがえってきました。16年前の自分の経験から言えることは、子どもは口に出さないだけで、恐怖やストレスを心の中に閉じ込めてしまっている。だからこそ、思いっきり遊んで発散する場が必要であると思いました。16年経った今でも当時の揺れは今も体に残っています。だから、今回出会った子どもたちは、地震の事が一生心に残るであろうと思います。

現在は震災発生当初とは異なり、目に見

えない被害の復旧が必要であると思います。震災の復興は本当に長期間にわたって続けなければなりません。だからこそ、決してこの震災の事を風化させるのではなく、被災地から遠く離れた場所にいる自分たちが、どんな小さなことでもいいので、今後とも継続的な支援が必要であると強く感じました。

最後になりましたが、この夏休みに私たちが活動できたのは大学事務局や教職員の方々、そして浜田市民、島根県のみなさまからの募金の支えのおかげでもあります。

本当にありがとうございました。

